

〔私の生涯学習〕

「科目履修生」

上 村 美和子
(平成20年度科目等履修生)

細々と毎日を過ごしていたじゃじゃ馬娘が、「結婚」というライフイベントにより“縁の下の力持ち”を余儀なくされた。

短い職歴の中で、キャリアアップ研修を全く受けず経営する立場となった私。10年・20年と経過するうちに、技術だけでは営んでいけないことに気付き、多くの関係書籍を読んだり通信教育の受講も試みた。しかし、自宅併用の業務・子育て・介護を抱えながらの自学は容易なものではなく、すぐに挫折してしまう姿は想定とおりである。

自宅を離れて「個人」として学びたいと思った中で出会ったのが長岡大学の生涯学習公開講座。夜間のため、受講者はほとんどが社会人であった。初老の方がそろばんをはじきながら、私共には到底気付かぬ鋭い質問をされるなど、現場を預かる方々の真摯な態度に深く感銘を受けた。この学校なら私も学ばせてもらえるのではないかと素直に感じた。

「科目履修生」なんと特別な響きを持つ言葉なのだろう。毎日の業務の中で喘いでいた私にとり、酸素マスクのごとく舞降りてきた特別な時間。日々の業務に支障なく、知識を得られるなど想像もできなかったが、この1年は言葉に表せないほど有意義なものであった。

講義内容に現場を照らし合わせながら業務を行うことは、我が職場の問題点を明確にしていき、どのように改善できるのか深く考える毎日だった。すべての業務にエビデンスを持つ事ができ、職員と密接なコミュニケーションをとりながら有効なカンファレンスを重ねることができたことは本当に大きな成果だった。大きな組織に属さない個人事業者にとり、日常業務を行いながら学べる制度が身近にあることは、この上なく幸せなことであり感謝するばかりである。

私が受講した1年は、米国のオバマ大統領就任とともに世界経済の記録に残る大恐慌の1年である。食品偽造を始め、金融破綻、大企業の人員削減、地域経済の危機など職場環境も刻々と変化するなかで、リアルタイムに現状を踏まえた講義は、1コマでは足りないほどの時間と内容であった。私にとって「学ぶ」ということは「生きている」事を実感できることでもあった。

我が子と同じ年齢の学生さんと一緒に受講することに恥ずかしさもあったが、いつかこの学生さんたちもこの講義の偉大さを感じる日が来ると信じている。業務優先となっていたため、確認テストは惨憺たるものであったことは言うまでもなく、熱心に講義してくださった先生には申し訳なく思うばかりで恐縮する。

いくつになっても「学ぶ」ことができる幸せを感じながら、一科目づつ“科目履修生”として、今後も日々の学習を重ねさせていただくことに心から御礼申し上げます。